

# 投資をするなら押さえておきたい 基本ルール「後編」

前号では、投資をスタートするにあたって知っておきたい心構えをまとめました。今回は、もう一歩踏み込んで、投資する際に役立つ基礎知識(理論)をまとめてみます。前回と今回の2回のコラムを読めば、投資をスタートするにあたって基本的なリテラシーを学んだといえると思います。

## 基本ルール1 投資のスタートは 少額から

「投資」というと、初心者ほど「まとまったお金でやるもの」というイメージがあるようです。

しかし、投資は、数千円からスタートできるほど手軽なものになっていきます。「投資信託」という仕組みがあり、私たちは積立定期預金をするような感覚で、少額からでも投資ができるのです。例えばT O P I Xに投資する投資信託を1万円円買えば、東証一部上場企業約1800社すべてを数円ずつ購入したのと同じ投資ができます。

「株式」も、購入単位が引き下

げられたことにより、5万円から約700銘柄、10万円なら約1500銘柄から選ぶことができます。あなたが知っている有名な企業の株主にも、実は手軽になれるのです。

投資経験が浅い人ほど、少額で投資をすることを勧めます。投資に伴う価格変動について経験が浅いのですから、無理な額で投資をする必要はありません。車の免許を取り立てて、いきなりロングドライブには行かないようなもの。仮に損をしても少額で収まり、勉強代として納得できる金額からスタートすべきです。売り手から高額の投資をすすめられても断る勇気も必要です。

## 基本ルール2 ひとつの対象より 複数の対象を

なお、投資をする前に、当面の生活に必要な貯蓄をして、生活の資金的な基盤と投資に臨む心の安定を確保することは当然の前提です。当面使う予定のないお金の範囲内で、まず少額からスタートしましょう。

例えば、どんなものが好きか分からない知人の家に招待されて、お土産のお菓子を選ぶ際に、一種類に決めずに、色々なお菓子の詰め合わせにすることで、失敗のないようにしようと考えたことはありませんか？

投資においても似たようなと

ころがあります。それは「一点勝負、集中投資」では、一つの投資対象の価格の動きに全てが左右されてしまう、ということ

です。これを避けるために、複数の対象に投資する方法があります。つまり、価格の動きが異なると考えられるものをいくつか同時に持つておくことにより、一つの価格が下がっても、別のものはそれほど下がらない、または上がることにより、全体への影響が小さくなる、という考え方です。これは「分散投資」という手法で、「分散投資」の理論の研究はノーベル経済学賞も受賞しています。分散投資の最大の効果は、「大きく負けない」可

### 【執筆者】

ファイナンシャルプランナー、  
消費生活アドバイザー

### 山崎 俊輔 (やまさき しゅんすけ)

ファイナンシャル・ウィズダム代表。企業年金研究所、FP総研を経て独立。商工会議所年金教育センター主任研究員、企業年金連合会調査役(確定拠出年金担当)など歴任。インターネット、雑誌、講演等を通じ、若年層のライフプラン・投資教育に取り組んでいる。1972年生まれ。

図1: 2つ買うほうが大きく負けずにすむ

**手みやげを持参するなら  
詰め合わせのほうが失敗が少ない**

**複数の選択肢をもつほうが  
大失敗を避けられる可能性が高い**

**投資も1点勝負をせず  
複数買う方がよい**

2つ買えば値動きは安定的になる  
大きく負けずにすむ

個人向け国債

国内株式

2つ買えばどちらかの市場の下落  
にも耐えられる

外国債券

国内株式

可能性が高くなるということです。投資の世界では、これから値上がりする対象を確実に予見することは困難です。であれば、「組み合わせ」を考えていこう、と

の発想が大切です。投資を行う金額は低くなっていくため、最初から2つ以上を選んで投資をスタートさせることも簡単にできます。「個人向け

投資というと、大金の全額を「買いだ!」「売りたいだ!」と売買を繰り返す、映画やドラマに出てくる相場師のようなイメージを持っていませんか? 個人の資産形成という観点から見た場合、「全額の売買」を行って利益や損失の確定を繰り返すような方法は、手法として望ましくありません。

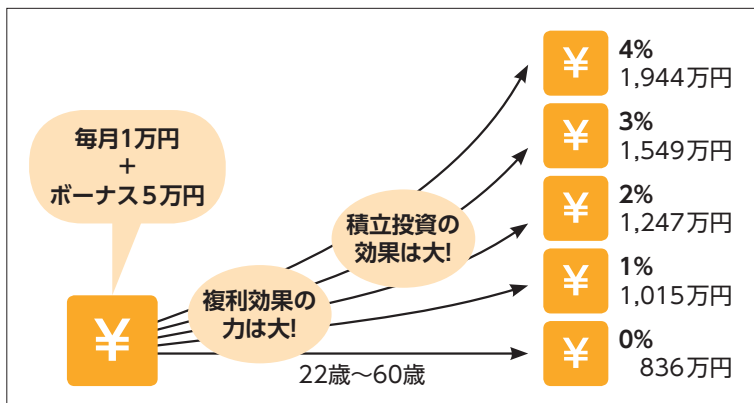
ここでは、「追加入金」(積立)

**基本ルール3  
投資は毎月「追加入金」  
(積立)するイメージで**

国債と株式投資信託を買う」とか、「国内の株で運用する投資信託と外国の債券で運用する投資信託を買う」といった形で、値動きが異なると思われる組み合わせを考えてみてください。

分散投資をすれば絶対にマイナスにならない、というわけでは決してありませんが、異なる性質のものへの分散投資を心がけた人のほうが、そうしなかった人より大きく元本割れする可能性は一般的に小さくなります。安定した資産形成のためにも、ぜひ「1つより2つ、2つより3つ」など意識して投資対象を考えてみてください。

図2: 追加入金の効果は大きい



による投資について考えてみましょう。

毎月定期的に積立を行う投資方法を「積立投資」といいます。投資信託などでは数千円程度から千円単位で好きな金額を選べることがほとんどです。

仮に毎月1万円の積立を行い、ボーナスのつど5万円を追加的に積立すると、年22万円を投資に回すことができます。22歳から60歳までこれを続けければ、元本で836万円ですが、

年3%の運用が実現できれば1,500万円強になります(ここでは手数料等は勘案していません。以下同様)。

もしこれを毎月2万円の積立ボーナスのつど10万円ずつ追加積立すると、3,000万円強です。月3万円、ボーナスのつど15万円だと4,600万円強です。

では、毎月の積立額を増やしたり、ボーナスからの投資額を増やすための方法は何でしょう。1つは、仕事から得る収入を増やすことであり、もう1つは、節約することです。毎月少しずつの違いが、長期的には、資産の大きな違いとなることも知っておきたいポイントです。

なお、定期的(毎月、ボーナスごと)に一定額を投資していくことには別の大きな効果もあります。「投資対象の価格が安いときには多く買う、高いときには少なく買う」ということが、自動的に実現するのです。これは、平均的な取得価格を低くするうえで、非常に有効な方法です。ここでは投資信託を例にして説明しましたが、定期的(毎月、ボーナスごと)に株式を自分で選んで買う場合も同様の効果が働きます(一般的には後者の方

が手数料等のコストは安くなります)。

**基本ルール4**  
続けることでお金が大きく増えやすくなる

個人の資産運用においても一つ大切なことは、「できるだけ崩さず、続ける」ということです。

もちろん、何か重要な資金ニーズがある場合は、投資のお金を解約して使ってもかまいません。例えば子どもの大学入学金の不足を借金して賄い、一方で投資は続けるような方法は望ましくありません。借金の利息は確実にかかりますが、投資の運用益は不確定であるためです。

しかし、運用の利益が出ると、すぐに利益確定し解約して使ってしまう人がいます。株価の上昇によって得られたお金なので、**「あぶく銭」**の感覚でムダな消費に回してしまったりするのはよくありません。

投資の期間はなるべく長くとってください。たとえば、企業が新商品を開発し、工場で生産し、CMなども流しながら販売を行っていくためには何年もかかるのが普通です。株価の日々の値動きが必ずしも企業の実態

を反映していないことがあります。企業の成長の果実がきちんと株価に反映されるためには、数年はかかるというくらいの気持ちで、投資期間を見込んでみてください。

投資においてなるべく長い期間を意識することで、中長期的な資産形成を行いやすくなります。資産の成長が再投資されることで、お金が増えるスピードが高まっていくからです。これを「複利効果」といい、アインシュタイン博士も絶賛したといわれるものです。先ほどの年3%の運用で資産が大きく増えた例も、この複利効果が生じたことによるものです。

特に老後のことを意識した資産形成を考えれば、自分が定年退職を迎えるその日まで(あるいはその後も!)運用を続けていくのだと考えてください。

**基本ルール5**  
投資対象は真剣に吟味する

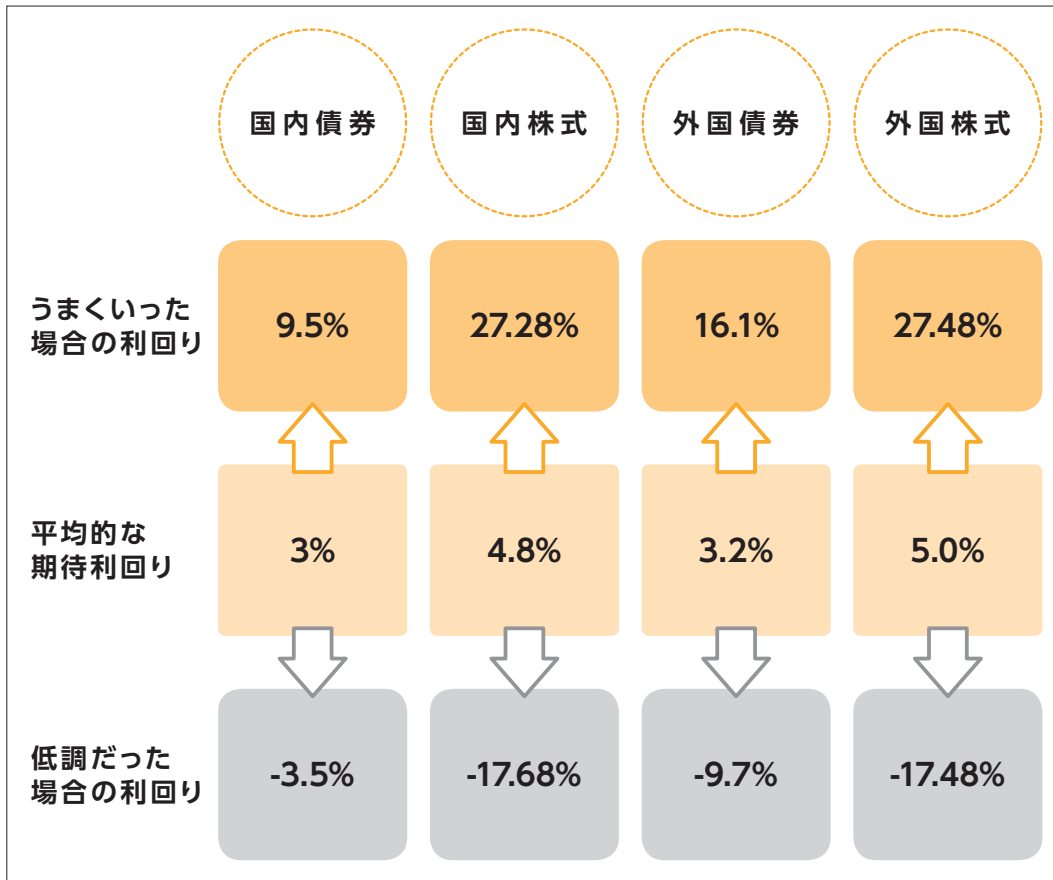
中長期的に資産を形成していくためには、投資対象は、「長期的に価格が上がっていく」ものでなければいけません。投資対象として選んでいるものが、そ

のような条件を満たすものかどうか、真剣に吟味しましょう。

一般に、個別企業の株価は、その企業の業績(とくに利益)の影響を大きく受けます。株価全体は、企業業績全体の影響を大きく受けます。企業業績は景気や経済成長の影響を受けます。景気は一般的には循環します。経済成長は人口増加や技術革新などの影響を受けます。例えば、個別企業の株式を買う場合には、「その企業は、長期的に利益を上げていくことができる企業か」をよく検討しましょう。株価全体を買うような商品(日経平均株価、米国のダウ平均株価などに連動するインデックス型の商品)もあります。その場合には、長期的に経済成長できる国かどうかの判断も重要となります。

また、いわゆる**「バブル」**にはとくに注意が必要です。株価全体も、個別企業の株価も、その国や企業の実態を大きく超えて、高い値段がつくことがあります。**「期待」**が過度に高まっている場合にそうなります。このような場合に購入すると、その後価格が急落し、資産を大きく減らしてしまうことがありますので、特に気を付けましょう。

図3: 年間これくらいの値動きがありうる



※年金積立金管理運用独立行政法人ホームページをもとに作成

**まとめ**  
投資を無理なく資産形成の一部に組み入れよう

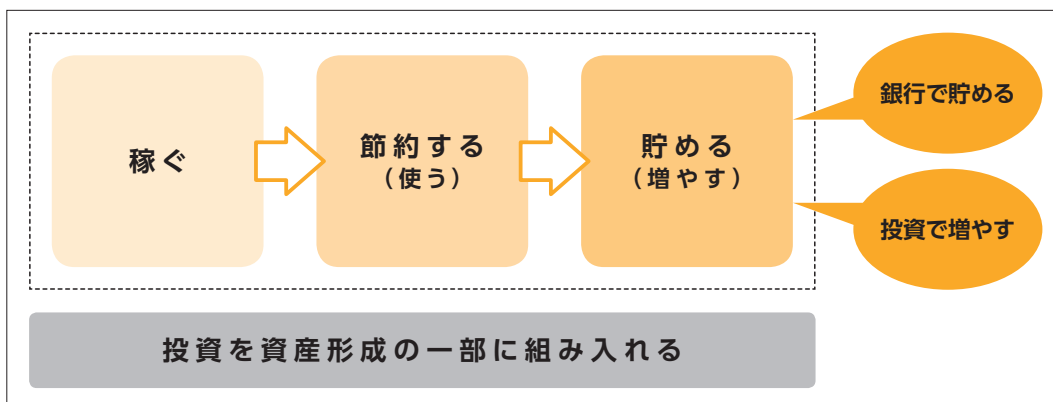
ここまで投資に関する基礎知識を述べてきましたが、最後に、

投資とはそれぞれの人のライフプランの下で考えるべきという基本を忘れないようにしましょう。つまり、まずは自分のライフプランを立て、いつどのような目的で  
お金が必要になるかを考えるこ

とから始めて欲しいのです。収入・支出については、まず「しっかりと仕事で稼ぐ」ことが大切です。より多く稼ぐことができれば投資を行う元本をより多く捻出できるようにになります。共働きやキャリアアップは運用の源泉でもあるのです。また、「ムダのない消費をする」ことで、同じ年収であってもより多く貯金や投資の原資を残すことができます。お金を上手に使うという点でこれも運用の一部なのです。年収が高い人でもムダづかいがひどくてまったく貯金していない場合がありますが、これは投資以前の問題です。そのうえで、お金を増やす流れの一部に投資を組み入れていくのです。一部は定期預金などです。しっかりと堅実に増やし（利回りは低いですが安全性は高い）、一部をリスクのある資産に振り向け高い利回りでの資産の成長を目指していくのです。

投資には難しい面もありますが、チャレンジしてみると「面白い」と感じる人が多いようです（ただし、デイトレードなどに熱中するのは、投資手法としても決してお勧めできません）。ニュースを見る目も変わり、世界が大きく広がります。

図4: 投資をお金を増やす流れの一部に組み入れる



投資の基礎知識を身に付け、無理のない範囲で、投資の「スタート」を切ってみてください。前編・後編の2回に亘った連載が、皆様の中長期的な資産形成に結び付くことを願っています。